

報



會

會 岳 山 本 日

25

月 四 年 八 和 昭

早春藏王日記

角田 吉夫

白石―遠刈田温泉―峨々温泉（三月十九日）

しろいしの驛から四里、自働車を走らせて、山麓の湯の町へ入る。湯の煙は静かに立のぼり、のどかな春の気分がみなぎっている。

雪の片影だに見られない遠刈田。街端の高原の臺地清水ヶ原に登り切つて、初めてスキーをはく。潤葉樹林の中を、緩かな登りがつづく。これが針葉樹であれば、立山の彌陀ヶ原の再現であるが。

時折、刈田岳の頂附近の白い樹木の林が見えたかと思えば、又霧に包まれて仕舞ふ。そして軽い粉雪が舞つて来る。上は吹雪いてゐる事だらう。

晝近く峨々温泉へ着く。刈田へ続く高原から北側の濁川へ二百米ばかり下つた谷間にある。二階造りの建物が幾棟も並び立ち、斜面に應じて雄段のやうな配置は、何處となく信州の發哺に似て、懐しさを覚える。近くには峨々の名にふさわしい大きな岩壁が峙つてゐる。夫婦岩と呼ばれるのが面白さうに見える。

岩とスキー。これは穂高に於ける相対的な雪・岩・アルプスの關係ではなく又藏王の頂上とも全く切離したものであるが、グレンデとして二つの対象のある此峨々を面白く思ふ。又、はい、温泉を持つてゐる。

峨々温泉―賽ノ嶺―刈田岳―熊野岳―高湯（三月二十日）

實によく晴れ渡つた朝だ。今年になつて二回目とか三回目とかいふ恵まれた日だ。そして今日は十八日振りの快晴だといふ。

熊野岳の頂を目指す者、十数名、七時五十分發。クラスとした高原を賽の嶺に向ふ。一時間にして半ば雪に埋れた宮城縣體育會の小屋に着く利用者のないせいか、管理者の手落か、立派な建物であるが、窓は毀れ雪は吹込み、役には立ちさうもない山日記には冬期使用可能なりと、縣の報告を信用して書いたが、これでは又、山日記殺人事件の恐れがありさうだ。

賽の嶺から刈田岳につづく高原は渺茫として遮るものもない。吹雪が来たなら何處へ迷ひ込むだらう。樹水の美観は刈田の頂近くに来て、初めて現れた。杉ヶ峰から屏風岳の斜面は實に雄大で、すばらしい針葉樹林がある。藏王の眞のバラダイスはあの林の中ではなからうか。

刈田岳のお宮はすつかり雪に包まれて、クリスマスケーキと變つてゐる。強い風が朝日連峰を越えて吹いてゐる。賽の嶺まで押寄せた雲海はそれ以上、進むことも出来ない。

白い山がズラリと列んでゐる。富士型の鳥海、月山の本曾御居に似た山容を初め、朝日、吾妻、飯豊の連山だ。この大觀の下に、一つの悲劇のエピソードが行はれてゐた。それは一月のある吹雪の日に、倒れた柏源一郎氏の遺骸を今、馬の脊から上山の町へ運ぶ人々の群だ。恰もセカンチニーの繪のやうに。

熊野岳までは四十分足らずで達した。（十二時二十五分）こゝにも雪化粧に美しいお宮が一つある。恵まれた登頂だ。賽の嶺の雲海は動きさうもない。戻る者、越ゆる者がシー・ハイルを交してゐる。幾度か、月山と鳥海の美しい姿に憧憬のまなざしを送りつゝ、高湯へ降る。地蔵に向ふ斜面は粉雪だが、波状雪の波は大きい。テレマーク・ニーで乗越したかと思へば、又飛ぶこともある。雪質と技術、山スキーでは此の研究が最も必要なのではなからうか。

三寶荒神の粉雪と樹氷は印象が特に深い。全く雪に包まれた針葉樹は一つ一つが、恰も精ある如く、特異な姿態をなしてゐる。この中を夢の中の人のやうに、ボーゲンを濫いて行く。この夢の世界が終つたところに岳樺の林に繞らされた小池とコーホルトヒュツテがある。月山が遠く霞んで見える。

こゝから高湯までは近い。二十町とかいふ。赤いスキー指導標の番號が零になるまで滑れば、高湯の湯の街だ。ザラメ雪とフキム・クラストを破つて行く響の中にも春が來てゐる。

高湯―半郷―山形（三月廿一日）

のどかな春の藏王越えの昨日に於ける今日は、朝から眼もあけられず、呼吸も止るやうな恐しい吹雪だ。昨年の今日は常念で、有明の案内塚田が吹雪で倒れ、中山彦一等が雪崩でやられてゐる。

今年も又、誰か何處かで、やられてゐるのではなからうか、と案じつゝ、山形へ向ふ。

主 要 目 次

★早春藏王日記……………角田 吉夫（一）

★傳説から守る爲めに……………

★風景描寫など……………桑原武夫（二）

★後立山難考……………冠松次郎（三）

★アルパイン・クラシックスの追憶……………島田 巖（四）

★マツターホルン東西攻撃とバーカー兄弟の登山史上に於ける動跡……………吉澤 一郎（七）

★秩父と其の山村……………原 全 教（六）

★冬の富士……………廣 瀬 潔（八）

★研究 欄……………

1. 山岳語彙……………九州山岳聯盟（八）

2. 登山用具重量表……………

……………三澤 龍雄（八）

★山 の 消 息……………

有志晩餐會、岩菅スキー登山遭難、早月尾根……………（九）

★會員通信……………（一〇）

北海道より、北アルプスより、三國川より中ノ岳へ、八幡平、岩木山、鳥海山、印度だより、雜誌「ケルン」の發行……………（一〇）

★茨木氏、山岳畫個人展覽會開催……………（六）

★陸地測量部新刊目錄……………（六）

★圖書基金に就て……………（五）

★會務報告……………（二）

常例理事會、新入會員紹介、退會者、會員計報、會員住所變更新着圖書……………（二）

★山小屋委員會報告……………（三）

★寫眞 藏王山三寶荒神の樹氷……………（三）

……………角田 吉夫（三）

傳説から守るために

福 島 昌 夫

口碑に曰く、「……」等と云つて、

傳説を味方に自己の説の裏書をしようとする場合がある。また、それは單なる傳説である、としてたゞいなものと拒否する場合もある。また或種の人は傳説を傳説として聞き、傳説として讀み樂しみこそすれ、何等問題の中樞に置かうとはしない。兎まれ傳説が傳説であることは、小説が事實の記録でないのと同じことであるのに過ぎない。

これは傳説を輕蔑し、無視しようとするのではないのであるが、少くとも、何らかの歴史的発展の推移を顧みる場合には、傳説よりも事實の記録の上に、より多くの重要性を認めねばならないと思ふのである。

宗教の背景なしに、登山が登山として本邦に行はれ始めたのは、何時頃からのことであつたか。判然しないのであるが、日本山岳會が二十五週年を祝つたのは一昨年のことであつた。山岳會の創設明治三十九年に先立つ十六年——志賀重昂氏の『風景論』（明治二十七年初版發行）の出版の前を餘り出ない年代のことではあるまいか。明治二十四年には西駒ヶ岳に於ける學生安東軍平氏の遭難横死の事件があるから、當時志賀氏の唱導された「登山の氣風作興すべし」のスローガンの下に、山岳に對する一般の注視は徐に開かれてゐ

たことであつたらう。

たゞ單にかうは想像してゐるのであるが、後進不勉の自分は、その當時の登山界の状態を知らないのである。知らないのではあるが然し、今日に至つては、本邦山岳登山史の出現を云々することは、後きに過ぎると思ふのである。現るべくして現れざるものと云ふべきである。

嘗て學生で時間的に恵まれてゐた頃に、一人の山友とこのことを議したことがあつた。當時の我々には、霧の彼方の山相を想ふよりも、登山史の研究は至難事であつた。それは不可能事に近いことであつた。それよりも、受難史の或頁を蒐めゆく方が、遙かに分相應のことであるとした。然し乍ら、その翌年この山友は小槍で遭難横死して、彼は自ら選んだ受難史の寂しい一頁に身を投じて了つたのであつた。それまでの間に我々の微力が得たものは、僅かに一篇安東軍平氏のそれのみに過ぎなかつた。山友の死は受難史上の資料の蒐集を意圖的に中斷せしめたのである。連想が上高地まで引取りに行つた時の、彼の惨ましい姿に連れ込まうことを避けたのであつた。それは敗北の経験である。

然し乍ら今日に於て山岳に關する記録的な研究を得て置かない限り、山岳を繞ぐる幾多の神秘な傳説の如くにして、當然残さるべき多くの記録をみす／＼傳説に墮せしめるの怖るべき結果となり、その資料の散逸するの危険性を看過すること、なるであらう。

傳説から守るために、本邦の登山史の研究を提唱しなければならぬのである。登山史の研究は附隨的副産物として受難史の完成をみるかもしれない。また、同時に山岳思想の變遷の跡を省みることが、興味ある必要事でもあるであらう。

担て加へて、本邦に於ける日本山岳會の地位は、「日本山岳會史」研究の當然の責任をもつものである。日本山岳史に於ける日本山岳會史の地位は、こゝに云ふを要しない程重要なものでなければならぬ。日本山岳會史の完成は、本邦に於ける山岳關係の全ての史的研究所を完成せしめる最初の、而も最も意義ある一歟でなければならぬ。

他の全ての山岳史の研究は、一般の好事家に委ねるもよからう。然し乍ら會史の完成は會が自ら完成せしむべき當面の任務の一つであらう。日本山岳會を傳説から守るために會の事業としての「日本山岳會史」の研究を切望、待望するのである。

（一九三三・四・八）

風景描寫など

桑 原 武 夫

お互に山登りの好きなものは景色を眺めるのが好きである。これがまた逆に山へ登る動機の一つをなして

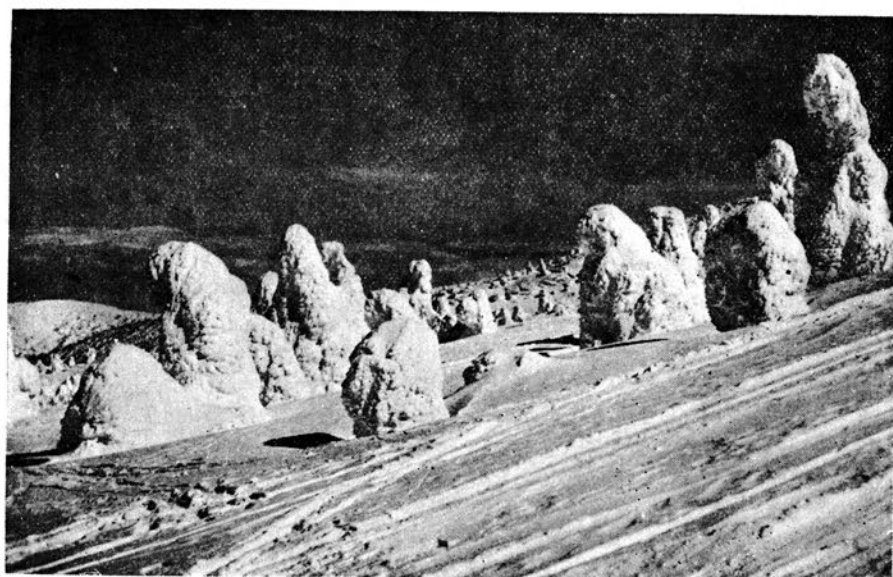
ゐるのだ。ところがこの頃山登りは無上に好きだが、風景などはどうでもよいといふやうな人が時々ある。登攀そのものの、意欲が強過ぎるせいであらうか、ともかく僕らから見ると惜しいやうで、此頃の登山記の面白くないと言はれる原因の一つもこゝにあるのではないかと思ふ。

それは兎も角、僕は小説のやうなものを讀んでゐても、山と限らず風景描寫のところは中々氣になる。人が山へ登るといふことが既に、佛蘭西の哲學者フイエなども利益を離れた藝術行為の最適例だと言つてゐるやうに、餘程高尚な人間行為であるが、人が風景を見て樂しみ、それをまた抽象的な文字を用ひて書き現はすといふのは、更に高級な、考へてみれば随分不思議なことなのである。

その描寫の仕方がまた西洋と東洋で随分相異してゐる。一口に言へばむかうは人間的で意欲的であるに對し、こちらは非人間的で靜觀的だと言へる。試みに景色を現はす言語を調べてみて、彼等は *payage, landscape, landschaft* など、いつて皆國原を現はす字から出てゐて、それ風景的な感じの原野といふ意味より、羊の毛が刈られるといつた風な、つまり人間的な、さらに實利的な裏付けが感じられるのである。ところが我々の方は風景、風光、景色など、みな風、影、光、色といった抽象的な文字から成り、又山水など、いつてもそれは具體的といふより矢張り精神的なので、いづれも人間生活に

直接の關係はない。（ついでに、外國語がみな原なのに、こちらは山であるのは我々には見逃し難い。風景畫といへば西洋では主として草原になるが、東洋では必ず山を入れることもこゝに現はれてゐる）それで例へば小川の流を一つ寫すにも西洋では必ず「潺湲」といつて擬人法になるが、東洋では潺湲など、全く人間臭がない。

それが小説などにもよく現はれてゐる。フランスの文學などは殊に人間的だから、自然描寫の出で來たのはごく新しい。第一 *le paysage*（風景）といふ字はじめて佛語に用ひられたのが一五五一年で、*le paysage*（風景畫家）といふ字は一六五一年にならぬと出てこない位だから。やつとルソー、シャトーブリアンなどで描かれる山野もみな脂ぎつてゐてかなはない。フロベール、モーパッサンあたりのものは流石に素晴らしいがそれでも何か艶々しくて、輪廓がはつきり切れすぎてゐるやうなところがある。比較的自然的好きな英人のものは、そんなことはなからう。スチヴンのやうなおつとりした、惡くいへば間の抜けたやうなのはイギリスでないと思ふ。ヤングのは何時もながら立派なものである。支那が古くから山水を重んじた事は誰も知つてゐる。畫になつたのも西洋に比して少くとも八九百年は早いであらう。文章も亦然りである。それで少し餘談になるが、此の間狩野君山先生をお訪ねして、その然る所以をお尋ねしたところ、道教の影響といふ他これといふ説明もされな



藏王山三寶荒神の樹氷（一九三三・三・〇）

角田 吉夫

かつたが、これを見給へ、といつて出してこられた先生秘蔵の『李卓吾先生批評紅拂記』といふ明代の人情本をみるとその挿繪は男女が眼に媚をたへ、その手は相とらんばかりであるのに、うしろには峨々たる山岳が描れてゐる。一流の畫家が名を秘しての作だらうといふことであつたが、その皴法の素晴らしい山容には感嘆してしまつた。これは餘程面白い問題を暗示してゐると思つたことである。

さてわが國も自然を懷しむことは随分と昔からで、立派な詩文も少くはないが、馴れすぎて自然をじつと眺むことが少なかつたのと、マンネリズムのために、その發達が妨げられてゐた。現代の山の紀行にすら、屢昔からの花鳥風月の表現法がつきまとつてゐるのにはうんざりする。しかし例へば高嶺虚子あたりの叙景は、俳句によつて鍊へられた眼をもつ故であらう、氣品の高さも穢かさも、世界のどこへ出しても第一流に相違ない。明治以來小島鳥水氏などはもとより、他にもすぐれた風景描寫をなした作家は少くはないのである。

近頃の山の紀行が面白くない、といふことには私も遺憾ながら同意せざるを得ない。登らるべき山が盡きたものもその一因であらう、しかしこれは逆に考へてみれば、事實そのまゝに追隨した案内書的なものを離れて、眞に山を觀てかく一つの機會ともなうところである。私は今西錦司氏ほど紀行文の將來に悲觀したくないのだ。日本語は風景をあら

はす語彙は實に豊富なのである。それを、在來の所謂美文的表現を避けて、巧みに使役し、眞の觀察によつて山を描くならば、立派なものはまだ／＼作りうる筈である。山が不足なのではなくて、人が不足なのである。つまり山に登攀することだけしかないでゐて山を描かうとする人ばかり多いからではなからうか。

後立山雜考

冠松 次郎

後立山と云ふ名は、立山の東方に聳ゆる連嶺。即ち越中方面から見て立山の後に連亘してゐる峰と云ふ意味で與へられた、越中の呼稱であることは、今日では異論がないと思ふ。信州方面では、この山脈を總括的に呼ぶ名稱を持つてゐなかつたやうだ。そして漠然と西岳と呼んでゐたと云ふことを、私は信州の人から聞いたことがある。

地理學者はこれを飛驒山脈の一部として、北飛驒山脈と云ふ名を以て呼んでゐるらしい。併し個々の山名については、山麓の者によつて大體つけられてゐたやうだ。

それが明かに定められたのは、登山者が入り込むやうになつてからであつて、今日では最早、一つの山の名が二つある爲に、二つに數へるやうな間違ひは考へられない。

どの山でもさうであるが、この後立山連峰も、山名は多く、その山々の形、特質、殘雪の形や隈取、或はその山々から出る大きな谷の名など

つてつけられたものが多い。

白馬岳の北方に連なる大日岳（小蓮華山）は、大日如來を祀つてゐるのでその名を得た。それから白馬岳の代馬、爺岳の種蒔爺さん、布引岳（鹿島槍岳の一角布引の頭）の布引等は殘雪の形、或はその隈取りによつてつけられたもの、形から來たものには、鉾ヶ岳、白馬鑓岳、割菱の頭の五龍岳、大黒岩の大黒岳、鹿島槍岳の背比べ等で、スバリ岳はスバリで岩集を意味してゐる（スバルは狭まるから轉訛したもの由）

針ノ木岳は近頃まで無名の山であつた。明治四十四年に、辻本滿九氏一行が、初めてこの連嶺を歩かれたとき、針ノ木峠の頭にあたるとこの山に、針ノ木岳と云ふ名を冠したのである。それから越中の木挽がこの山の尖つてゐるのを見て、針ノ木の槍と云ふてゐたのを私は覚えてゐる。澤の頭と云ふ意味でつけられたものに、赤澤岳、鳴澤岳、小澤岳などがある。澤の頭と云ふ意味で山名がつけられたものもあるし、反對に山名に因んで、その山から出る谷へ名付けた例がある。大黒岳の大黒澤、スバリ岳の大スバリ、小スバリ澤、立山の御山谷などもあるから一概には云へない。

それから針ノ木の蓮華岳の名も殘雪の形から來たやうだ。白馬連峰の別名大蓮華山の名は、殘雪の形に因まれたことは論を俟たない。

針ノ木峠以南の山にも、山形によつた鳥帽子岳の他は、多くは谷の名に因んで山名はつけられたらしい。最後に、五龍或は後立について私

の聞いたのでは、信州は曾て武田信玄の所領であつたことから、五龍岳附近の山々を、御菱即ち武田氏の定紋武田菱の尊稱に因んで、御菱とつけられたのだと云ふことだが、その真偽勿論明かでない。

後立山のことについては、私は知らないことだらけだ。それ故この方面の知識をもつてゐるゝ郷土の人が、この山脈を中心とした、地名、傳説等の資料を提供せんことを希望する者だ。

元來後立山連嶺は、最近まで主脈の山上には、祠一つなかつた位、宗教或は信仰に縁の遠い、且つ一般の人々にとつて、甚だ交渉の薄かつた峰々であつて、古くからこの山脈に入つてゐた者の多くは、獵人、藥草取、それから嶺山に從事する人々であるから、峠路でも、針ノ木峠が越中信用を連絡する物資交換等に用ひられた他は、大黒越、八方尾根、南越は嶺山の爲に、烏帽子登山道は獵師に、スバリ乗越、新越乗越、棒小屋乗越等は皆獵師の通過してゐた道であつた、白馬岳でさへ、最も古くから入り込んでゐたのは、嶺山探掘の人達であつた。白馬尻を中心とした銅山、越後側の針ヶ岳嶺山などの存在がよくその消息を物語つてゐる要するに後立山、殊に針ノ木蓮華岳から白馬岳に到る間は、最も里近くして最も人寰に遠ざかつてゐる、最も古くして最も新しい興味に満ちた山々だと思ふ。

それは勿論、黒部流域と云ふ深奥高大地域があり、立山群峰に相對してゐるからでもあるが。

アルパイン・クラシックスの追憶 (1)

— A・J のレビューを中心に —

島田 巽

はし が き

ヒマラヤの巨峰と取組む登山隊の澁淵とした精神、練磨された技術に満ちた報告書に、新しい時代の興奮を感じると同時に、かびがはえたやうな古いアルパイン・ブックに限りない魅惑を感じる氣持は恐らく、多くの山の本を繙く人々が持つて居るものではないかと思はれる。技術は革命的に進歩して行つてもその精神の故郷をいつも追想するといふ心持が、古い山の本を手になぜその本の中には必ず私達を感激させて呉れる或物が待つて居る——といふことが、いつになつても山の古書との交りを絶たしめない一つの理由なのであらう。

古い本といへば、もう山登りの本にも立派にアルパイン・クラシックスと呼ばれるものが数多く残されて来た。

昔の詩人や旅行者が書残した浪漫的な風景描寫や山麓の山村の物語などを除いて、登山者の筆になつた山の叙述、つまり本當に岩にかちりつき、氷雪と闘つた人達の筆になつた作品だけに限つても、私達は幾多の光輝ある名著を數へることが出来るこれらの書物は山を愛するものにとつて、恰もこん／＼と湧き出る清水のやうに、無限の情趣を與へて呉れるものだ。

アルパイン・クラシックスと一口に云つても、私達淺學の徒にとつては、その書名を擧げるだけが既に一通りの業ではない。

過日藤島先輩から一つアルパイン・ジャーナルのレビュー欄を第一巻から拾つて見たらばどうかとお話があつた。早速古い號を開いて見ると所謂名著が顔を並べて批評されて居り、例へば Tyndall の "Hours of Exercise in the Alps" のレマニに現れた論争だと Leslie Stephen が發行前、見本刷によつて書いた Whymper の "Scrambles" の長文の推賞の辭など私達の興味を惹くものが非常に多い。

私は之は早速やるべき仕事だと思つた。先づアルパイン・ジャーナルに依れば一八六三年第一巻發行後出版された名著ならば大抵レビューされて居るが、大體純粹な登山を對象とした山の本が生れたのはその年代以後であるから、このレビュー欄によれば英國のアルパイン・クラシックスは先づ間違なく拾ふことが出来るだらう。

又このレビュー欄の筆者には無署名のものもあるが、多く有力な會員が筆をとつて居るため、著者一著書

批評者の組合せに興味を感じることが多からうと思ふ。

更に藤島先輩が云はれるやうに「ともあれブック・レビューといふものは Complete Works として發行されてゐる人なら讀み得る機会もありませうが、中々普通は後世になつて讀む機会のないもので

す然しブック・レビューの中に特色と興味深い意見やまた當時の風潮や評者の人となりなどの現はれてゐることは申す迄もないことである。又或る場合には書物の讀み方、見方を教へられることもあると思ひます」

と正にその通りだと云へやう。一見かび臭い仕事のやうでありながら、案外その内に登山史上何等かの参考になるやうなものも見出されるかもしれない。

しかしまだ大して手もつけないで期待ばかり持つことは恥すべきことだ。當分私は出来るだけの資料は調べてみつもり古い批評を讀んで見たと思つて居る。

そして興味あるもの、どうしても擧げればならないクラシックス中のクラシックスのレビューを、大體毎號一つづつ書き記して行かうと思ふ。レビューの種類によつてある場合にはその全譯、或ひは抄譯又はレビューの紹介等この文の形式は一定しない。又、その主題となる本を私自身見ないものがある場合、それについて書くことは良心的に不愉快ではあるが、なるべく資料に忠實にして、藤島先輩の筆になれば一番よいと信

じるのだけれど、それが不可能な現在不得止がこの仕事を行ふことになつた。幸ひに、諸先輩の御叱正を得ば幸甚と思ふ。

"THE DOLOMITE MOUNTAINS."

Excursion through Tyrol, Carinthia and Friuli, in 1861, 1862, and 1863.
By Josiah Gilbert and G. C. Churchill, F. G. S. (8 Vo, PP XX, 576, maps III. 1864. London.)

アルパイン・ジャーナル(以下 A・J と略記)のレビュー欄を繙るに當つて、先づ順序として A・J 第一巻に紹介された幸福な本を取上げるべきだらう。

A・J で最初にレビューされた本は第一巻第二號(一八六三・七月)所載の

The Geological Evidences of the Antiquity of Man. By Sir Charles Lyell, F. R. S. Morray. 1863. 7 R. C. N. の名でレビューされて居る。この書こそ幸運な本として紹介せねばならぬものだらうが、氷河問題を通じて、山岳人の視野に入つて来た本で、本來山の本と稱するものではなからうと思ふので割愛する。

The Dolomite Mountains は第一巻で第二番目にレビューされた本で一八六四年九月發行の號に掲載されて居る。

この書は英國の登山界に始めてあ

のドロミテの岩山を紹介した本として非常に高く評價された。

著者 Josiah Gilbert, G. Cheetham Churchill の二人の英國山岳會入會資格が

「ヴェネチアアン、カルニツク、ジュリアンアルプスの山脈、ドロミテに關する著作の著者」として一八六四年四月メンバーとなつたことを見ても、この書の價值は瞭解されやう。未知の地域の紹介だけにこの書は、發行されるや直ちに大きな波紋を投げた。ある社交の席上で著者 Gilbert が一婦人から

「私はあなたの御本を拜見致したいと思つて居ます。私にドロミテのお話をすっかり聞かして下さいませんか？ 大變面白い人々だそうですね。希臘教の宗徒で、」などいふ珍聞を受けたことがあつたと D. W. Freshfield が云つて居る程、色々話題の中心になつたものらしい。

著者 J. Gilbert (一八一四—一八九二) は始め肖像畫家としての教育を受け、後文藝、美術の道に精通した人で Art, Its scope and purpose (1835) を始め數種の著書がある。D. W. Freshfield の追想録には次のやうに賞揚されて居る。

「彼が Gilbert 氏は所謂難しい山には生涯登つたことがなかつた。しかも彼は最もよい意味でのアルプスの先驅者であつた。吾々の間に於ける彼の名、彼の存在は數年間に渡り、アルパイン・クラブをして、その創始以來の廣い目的、手足を持つと共に頭腦を持つた體たらんとする目的を保持し、それに忠實ならしめるに預つて力あること大なるものがあつた。」

共著書 G. C. Churchill, (一八二二—一九〇六) は辯護士であつたが後年引退した、眞に愛好する科學的研究に専念して Geological Society 會員ともなつた。

その高山植物に關する知識は當時 John Ball を除いてその右に出づるものはないと云はれる。

この二人の著者は常に行を共にして、アルプス、ピレネーの山々を始め廣い範圍に渡つて歩き、多くの場合相共にその夫人達を同伴した。

一八五六年の晩夏、山脈を續けてダニウパから南方のガスタインへ來た時、彼等の眼に始めてリーンツのドロミテの姿が現れた。その姿を見て以來ドロミテは彼等の心の山となり、深くその山々と接しやうといふ決意が燃え上つた。勿論當時英國の登山家にとつて殆ど未知の名ドロミテへの探求がこゝに始つた。

The Dolomite Mountains はこの年から足掛九年を経て世に現れたのである。A. J. のペンネームは H. W. C. の名にやうして行はれた。(多分 Henry Warwick Cole 1812—1876. だらうと推定されて居る。A Ladies tour round Monte Rosa の著者の夫人。)

「著者達が訪れた地は注意深く觀察され、收獲は非常な正確さで記録されて居る。自然美の強烈にして又繊細な鑑賞が本の隨處に感じられ、その感激の下に著者達は夫々夫人を携へて、從來殆ど未

圖書基金に就て

知の路々を數多く踏査し、又少くも夫人達には非常な苦痛であつた

本會圖書基金は昨年度にて四十八口の御申込を得まして、これにより圖書の購入、諸雜誌の整理に當て、圖書室の充實を計り得ました事は、本會特に圖書係の深く感謝致す度であります。

然し乍ら、圖書室の内容は、會員諸氏の期望せらるゝ程度にはまだまだ達して置らないのでありまして、今後の會員諸氏の御後援をお願い致さればならないのであります。

從來基金の御出捐を願つて居りました方々へは書狀を以て御願ひ致しましたが、この會報誌上を以て尙篤志の會員諸賢に圖書基金の御出捐をお願い致す次第であります。

昭和八年四月 圖書係 (伊藤、松井、黒田)

追御申込の形式は左の通りであります。

日本山岳會圖書基金申込書 (昭和八年度圖書基金河口何圓也 (但し一口年額金五圓也) 右申込候

貴 名

日本山岳會御中

右御申込だけを先きに頂きまして後日御拂込下さつても結構に存じます。

に違ひない困難、不自由を忍び、遂に同地方に旅しやうとする人々

にとつて有益極まる立派な、一讀に價する本を作るに到つた。」と先づ筆者 H. W. C. は賞讃の辭を呈して居る。

Gilbert が自然美の鑑賞に秀で、居たことは D. W. Freshfield も賞讃して居る處から見て定評であらうと思へる。だがレヴェーの筆者は續いて云ふ

「しかしながらこの本は實際の登山家にとつては價值が少い。それは著者達が盡に止つて、『鴛が又はアルパイン・クラブの會員にだけしか用のない高所』へわざ／＼行かず、困難な登攀を行はなかつたためだ」と述べてこの書が旅行記として立派なのに不拘登山家にとつて價值少い點を指摘して居る。同時に記述が最も主たるべきドロミテの地域よりも他の Tyrol や Carniola 方面に多くの頁を費して居ることを不滿としそれらの地方の風景はむしろ第二流のものである旨を云つて居る。

又愉快なことには、著者達が同地方での食事のひどいことをこぼして居るのに對して、レヴェーの筆者はこゝでは歐洲一の鰻がとれるのだと大變通振りを發揮して

「不思議にもその鰻については卷中一度も言及されて居ない。この鰻は釣好きにこの上ない楽しみを與へるもので、且て同地方へ度々訪れた Humphrey Davy 卿を夢中にさせ、肝心の職務である科學的な探求心を忘却させ、とう／＼巨大なドロミテについて何等細かい觀察を行ふことなく、その地質

は花崗岩なりと推定して満足して居らせた程愉快なものである」など、云つて居るのは御愛嬌である。

最後に筆者は再び眞面目に、人々が從來汽車中から見て居た遠くのドロミテの美を讃く

「それは近くへ寄つたからとて決してその美しさを失ふものではなく、その點でドロミテの興味深い記述であるこの書の出現は、急速にドロミテを登山の對象として新しい人氣ある地とすること疑ひなしと信じて、欣快を感じざるを得ない。」と述べて居る。

事實ドロミテは急速に山岳界に君臨して、「J. Ball はその最も熱烈な歸依者である事を示し、L. Stephen は敬虔な、Tuckett は孜々たる、H. Izman は努力を惜しまぬ參詣者であつた」(Freshfield) 程登山家の魂をつかんだのであつた。

このやうに先驅者としての使命を果したこの書が、發行後半世紀を経ずして既にクラシックスの内に數へられたのも當然と云へやうか。

尙この書では Gilbert が紀行文の大部分と挿繪をもち Churchill は科學的研究、一八六〇年の彼の紀行文及び同地方の自然地理に關する最後の章を書いた。木版は E. Whymper の手になり、筆者に依つて「優れた美術家であると同時に完全な登山家である者によつてのみ爲し得る」とものと賞讃されて居る。



秩父と其の山村

原 全 教

秩父山塊の人文的位置を考へて見るならば、大體本州の中部に位し、

従つて又氣候の影響を考へて見ると、き冬期降雪量の少ないと云ふこの二つの最も目録し易い大きな原因に依り、この山塊が相當大なる高度と輪廓を持ち、深い溪谷を包擁し乍ら古來意外に人文との深い交渉を持つて來たことが容易に首肯し得られるのである。

古くは日本武尊の東夷御征伐よりズツ下つては戰國より幕末へかけての武將豪族のこの山塊を背景とした捲き起された興亡の跡を稗史野乘に通つて見ても、そこにこの山塊の峠路の發達即ち交通史と云ふものが明瞭に理解せられるであらう。又功利的對象としても古來極めて重要視せられ、卑近の一例をとると、彼の武田家の全山塊に亘る廣汎な金鐵採掘事業、又近年は安政年間に於ける水戸藩の御用材木商太田屋徳九郎の小金澤や丹波川上流一帯に及ぶ大伐採などを即座に擧げ得るのである。以上述べたる如き因果關係より、

この山塊には古くより多くの山村の發達を遂げた事も一の特徴として擧げに躊躇しない。千米から千四百米の高度に至るまで、相當の部落や集團を營みつゝある事も、この山塊に於ては珍しくない。埼玉、東京の府縣界の天目山附近には、十數年來老幼三家族のものが永住してゐるがそこは實に千六百米に及ぶのを見ても實に思ひ半ばに過ぎるものがある。しかも誰もが感ずる如く、秩父山塊の美は女性的、感傷的、東洋的である。その森林と溪流美を一貫したる美は一言にして盡せば女性的の美である。

この女性的、東洋的の自然な背景として、そこに生活の根を下した山村が、それ相應の人情風俗を醸成したことは當然の歸結である。何れの地方に於ても山村農村を問はず、郷土記と云ふものがあり、それが必ずその地方の自然の反映でなくてはならないのである。併し乍ら吾人は外來の惡風や都會の文化の浸潤によつて、その古來の良風美俗の破壊された實例を餘りに多く見るのである。北はどうだ、南はどうだ。又東北もかくして狭小な國土の中に次第に安住の地を失はうとすることを悲しむ然るに帝都に近く、最も簡易な散策地として、近時頗る遊歩客激増したる秩父山塊をめぐる山村に於て、反つて反對の現象を見る、換言すれば女性的の自然の反映である美はしい人原を古來のまゝ、未だに持續して居る事である。この原因は相當發見に困難かも知れないが、自分は尠くも左の如き諸點が與つて力あるものでないかと思ふ。第一は帝都に近いと云ふこと即ち關東平野の西を限ると云ふ地理的關係から近隣の交通機關が非常に發達し、古來利用せられた峠路が殆んど其の意味に於て原始的に還つたことと、第二は又近時山小屋の發達に伴ひ、登山者が多くそれを利用する爲、且つ指導標、林道の設置開通により、案内者の必要を全然認めないことなどにより、山麓の山村を都會人は多くたゞ忙しう通過し都會風を宣傳される機が非常に少ないと云ふこと、第三はこの地方山村民の氣質とも云ふべき保守的な事

第二回 山岳畫個人展覽會

日時 五月十一日より十五日まで
會場 於銀座尾張町 川島甚兵衛
東京支店階上
茨木猪之吉

等を擧げる。これ等は自分のたゞ大ザツパな極めて皮相的な見地からであるから素より正鵠を得たものであるかは大方の批判に俟つ外はない。

×

何れにせよ、この秩父山塊をめぐる山村の人情美と云ふことは最も大なる特徴であつて、自分はこの人情美を除外しては到底秩父の美を考へる事は出来ない。實に森林美、溪流美、人情美と、これを以て秩父の美を構成する三大要素と力説する。併し乍ら山村の背景としての山谷、人情美を透して山谷を観ると云ふ事が

近時絶叫せられて居る純正の山岳道から、又登山の第一義と云ふものから見て、嚴正批判の鐵槌を下されるものである事を憂ふる。自分は不幸にして西歐の偉大なる近代登山家の業績について知らない。又近代登山術に就ても白紙であることを悲しむ併し、そうした大業の心境の對象としては山谷にもそれ相當の境地があるから存在する譯であつて、妙くも秩父山塊の如き、人文的傳説的色彩濃厚なる山谷に於ては、或は自分の如き見方、立場も許されてよいのではなからうか。自らかうした立場に立脚してこそ始めて秩父の山谷の眞の全貌と云ふものを、最もよく理解し得るものと自負するのである。又一面秩父の山谷が俗化の程度にまで進展して居るから、それは國境の大屋根や、一部遊覽地に限られ、一度枝脈に足を踏み入れ、溪谷を窺くと、即ち立體的質的に見たときに意外に秩父山塊の廣い事に驚くのである。今日秩父の谷歩きと云ふもの、多くは林道を歩くに留まるのである。地元の鐵道業者等は眞の谷歩きを危險視し、排斥さへして居る。ただ僅に笛吹の上流、東澤西澤荒川の野猿の谷歩き位が關の山で、武州側やその他の谷々などむしろ原始美を多く放つて居る如き状態である。數例を擧げるならば、瀧川谷の如き實に八十に餘る深淵を持ち、支流の豆焼すに實に三十の瀑淵を包擁して居る。大洞谷の通らず等の險惡壯絶な溪観は恐らく全秩父に於ても稀なものであると信ずる。又小金澤、大常木などの緊張した惡場の連續もこの

種溪谷の典型的なものと云ひ得る。又山塊としても和名倉、御座、鶴冠、黒金、小川の如き靜寂比ひなき幾多の雄峰を持つ。秩父に原始境なしと嘆くこと勿れである。

自分がこれ等の山々に執着を持つと云ふのは屢々力説した通り、山村の人情美を考へるからで、過去七年の乏しい山歩きに於て同地方の山村の人々の庇護厚情に與つた事は到底筆舌の能く盡す所ではない。實に秩父の山村に於て人の持つ至美のものを窺ふことが出來た。山を生活の根據として日々山に親近し、しかも山に對して限りなき熱情を持つ多くの畏敬すべき山人に接することが出來た。それ等の山人との對談こそ最も楽しいものである。恰も高僧の示教を聞く如き一種の法悦すら感ずるのである。洵に秩父の山を想ひ谷を想ひ人を想ふとき、自分は絶大の幸福の身うちに漲るのを覺えるのである。素朴なる老翁温情玉の如き考爐又父祖の血を繼いだ剛健の個性を持つ兒童など皆自分の善き友であり、山に於ては師と仰ぐものである。

陸地測量部新刊地圖目錄

五萬分一地形圖修正
高田 三號 越後湯澤
岐阜 五號 荒島岳
長野 十一號 小諸
高山 八號 乘鞍岳
高山 九號 五百石
仙臺 十三號 月山
札幌 一號 岩見澤

(昭和八年三月三十日)

マッターホルン東面攻撃とパー カー兄弟の登山史上に於る功績

吉澤 一郎

研究といふと鳥辭がましいがマッターホルン登山史に關する文献を漁つて居て今迄色々興味ある事實に御目に懸つて居る。私如き者の知つてゐる事は人様は疾くの昔に御存知だと考へるのが穩かな行き方ではあると思ふが、廣い世の中には或はさういふ人許りとも限らない。今時、エヴェレストの上を飛行機がスイ〜と飛び廻つてゐる時代に、古めかしい又平凡な事を書くといふのはアナクロニズムも甚だしい事であるかも知れぬ。そんな事もあつたのかと今更年らでも感心して下さる人があつたならば筆者の喜びは此の上もない。

私がマッターホルンの登山史を一應研究し最も興味深く感じた點は、牽強附會の節もあるが、自然の宿命とも云ふべきものが存在して居る事である。最初の試みのツールナンシユ谷に行はれた事も其の一つ、又次に述べやうとするパーカー兄弟の試登が初登頂の成就せられた瑞西山稜に行はれたといふ事も奇しき因縁であると考えられるのである。洵に此の兄弟の試みこそはアーノルド・ランの口調を以てすれば「賢明なる東面攻撃」であり、ウインバーに從へば「不可解なる奇行」であつた。

× × × × ×

當時一般に此の途方もない東側面は近づき難きものと考へられ、アルマー或はメルヒオールと云つた錚々たる當時の名案内者にしても此の部分を試みる事に對してはひどく反對の意向を持つてゐた。此の外見上の不可登といふ事はいたくガイド及び旅行者の頭を抑壓して居たものであつた。

東面は記録の存する限り一八六〇年迄は全然誰の手も着けて居ない。所が此の年に到つて初めて全登山史上嘗つて見られぬ無双の剛勇を以て僅かに三名の若き英國紳士が、而も案内者を伴はず此の瑞西山側の山稜に猛襲を試みたのであつた。私の尊敬するクリリツジ以後の登山史家、故

J・P・フアーラー(1857-1929)は彼等を以て英國登山界の、否全英帝國を通じての誇るべき人物としてゐるのである。

茲に彼等三名に就て悉しく述べる餘裕は持たないが姓名だけでも完全に列挙して置く事にしよう。

1. Charles Stuart Parker (1839-1910)

2. Samuel Sandbach (1837-1905)

3. Alfred Trail (1837-1905)

一八六〇年七月及び六一年の七月の兩度、彼等三人は前記の如く東面

攻撃を行ひ第一回目は約一一五〇〇呎、第二回目は約一七七〇〇呎の記録を残して居る。

× × × × ×

序でであるから茲にマッターホルンの高さに就て一言して置こう。

從來ジークフリートの地圖には瑞西山頂を四五〇五mとし、伊太利山頂を四四八二mと記入してあるが之は誤測であるらしい。一九一二年の伊太利陸軍地理局の公報には伊太利山頂を四四七八・二八m(一四六八九呎)、瑞西山頂を四四七七・九六m(一四六八八呎)兩山頂間の距離を九二m(三〇二呎)となつてゐるが、一九二〇年にツエルマツト谷よりの三角測量に依れば瑞西山頂を四四八二mに非常に近いものとし伊太利山頂をそれより一・〇〇m低く測り、兩峰の距離を八〇・五九mとしてゐる。風化崩壊は避けられぬものとしても最短八間に二三mの低下は考へられぬ。又測量者の國籍によつて自國の頂が高くなつて居るのも興味がある事と思ふ。

× × × × ×

然るに私にとつて不思議に思はれるのは三人が兩度とも露營を行つて居ない事である。尤も兩度とも初めから瀬踏みの積りで行つたらしい點もあるから或は當然の事であつたかも知れぬが、若し天候さへ許し露營の準備さへあつたならば、後に述ぶるが如く彼等として、必ず初登頂の榮譽は三人の享くべきものであつたらうと考へるのである。

尙第二に不可解な點は此の年以來彼等は一度もツエルマツトを訪れず

マッターホルンを試みる事がなかつた事實である。

然し乍ら三人の兩度の攻撃或は偵察が表面上何等の成果を齎す事がなかつたとは云へ、其の登山史上の功績は永遠に其の光輝を失はぬものであつたのである。

功績とは何であつたか、以下少しく之に就て述べ様と思ふ。

パーシー・フアーラーは嘗つてC・S・パーカーがその家族の一員に宛てたる一八六〇年七月二十五日附の書翰を發見した。其の後半の部分に次の様な句がある。

「……コル・テランへの最初の部分はモレイン(寧ろ氷河の上に厚く散在してゐる石と云つた方がいこでせう)の上を行く骨の折れる徑であります。然し乍らマッターホルンの近頃は非常に興味のあるものであります。特に其の側面に來て、あの緩く交つてゐる山稜(瑞西山稜)を見た時には大變面白と思ひました。それは非常に困難らしくはありましたが、恐らく全體がさうではなく、私達の試みたリツジの頂上まではドンドン登れ相に見えました。然し其の上の峰頂を爲す部分だけは實際もつと近づいて見れば、可能性あるものなりや否やといふ事は解りません……」以下略。

此の「」を附したる數言こそは非常に重大なる意味があるのである。これこそ實に後述の如く、近世ロツク・クライミングの根柢を爲す大法則であつて此のパーカーが如何に當時に於ける卓越せる登山家であつたかを實證してゐる言葉に他ならぬ。

又A・T・パーカーも亦最初にツムツト山稜に可能なるルートある事を指示した特筆すべき先見の明の所有者であつた。此の事に就ては他の機会に譲る事とする。

× × × × ×

茲にウインバーと共にマッターホルンの初登頂に成功し、而も其の下降に際しクロー、ハドウ、ダグラスと共に悲愴なる最後を遂げたるC・ハトソンはガイドレス登山に於て當時殆ど唯一の大家たると同時に優れたる代表者でもあつた。而もわがパーカー兄弟も亦此の派の卓越せる實踐者であり、既に本能的に近世ロツク・クライミングの發展が大部分を其處に根柢を置く大原理を把握してゐたのであつた。

即ち此の原理とは「或る岩場の可能性に關する可否は實際其れに接近した上の觀察に基くものでなければならぬ」といふ今日の吾々から觀れば平凡極まる法則であるのである。

當時に於ては一流のガイド仲間にあつても遠望による觀察のみで最後の斷案を下す事に満足する傾向が多く、ウインバー及び其のパーティは一八六四年にプレツシュ・ド・ラ・メエジの岩場を判斷する場合に此の域より脱しては居らず、名ガイド、メルヒオールの巧妙なる返答も亦此の法則には餘り近づいて居らなかつた。一八六四年のクローも一八六五年のアルマーも亦同様であつた。二流以下の人々に於ては其の後、長期に亘り此の舊態を保持し續けて居た

事は云ふ迄もない。

登山の初期に當つて人々の頭を強く壓迫した所の「不可登なり」といふ幻惑一は此の法則の完全なる把握によつて漸く其の勢威を失つて行つたのであつた。現代に於ては此の法則は普く承認せられて居る。従つて今日の吾々より觀れば前記の幻惑なるものが如何に當時の人々の精神上に強大なる勢力を占めて居たかを理解する事は甚だ困難である。

フアーラーは云ふ、

「私は此の法則が斯くも簡潔に述べられてゐるのを當時及び以後長期間に亘り世に現はれたる文献の上に嘗て眼にした記憶はない。」

× × × × ×

ワインバー或はギドー・レイによつて僅かに數行しか述べられて居る事柄の中に吾々は多少の詮索によつて其の人々の業績が登山史上に於て案外重要な部分或は役割を演じてゐる事に今更なる驚嘆せざるを得ない事がある。文献漁りの興味も一つは悠ふいふ所にあるのではあるまいか。

『冬の富士』

廣瀬 潔

北や南の冬山へ行く暇の無い中年のサラリーマンには冬の富士は手近ない遊び場だ。私はこの十数年毎冬一度は必ず遊びに行つたが、最近山麓にスキー場が出来た冬の交通がよくなつてからは毎年御殿場迄の回

數券を買つてちよい／＼出掛けることにしてゐる。この冬は割に早く山麓に雪が来たので、十二月十日(土)太郎坊附近の森林で冬の月を眺めながら一晩中滑り廻つて来た。一月二十九日(日)は日歸りで二、四〇〇米迄登つて見たが、一八〇〇米でアイゼン、二一〇〇米で珍しくステツプを切るような若水に出會つた。京濱から日曜日歸りでこんな水の冬山に遊べるかと思つただけでも暇のないサラリーマンの胸は躍る。二月十八日(土)は前日の新雪にすつかり嬉しくなり『この分では明日は頂上近くからスキーで……』など、虫のいいことを考へながら(もつとも七、八年前一度そんなことがあつた)午後六時太郎坊出發、東南微風の星夜を發行、翌十九日午前一時寶水山頂を眼下に見下す三〇〇〇米の邊りで風が西に變つたかと思ふと物凄く突風旋風に襲はれ零下三十度近い真冬の夜中スキー穿のまゝ急斜面の水雪に吹き上げられ吹き倒され荒狂ふ雪煙の中で辛じて滑落する身體をビツケルに支へ六合の小屋を見付ける迄約一時間半ふら／＼になる程打ちのめされ、夜明けと共にほ／＼の態で雪の吹き凌がれた氷結面をアイゼンで退却、スキー滑走を夢にしてしまつた許りが同行者に負傷者まで出来て散々な目にあつた。

二月二十六日(日)又出掛ける。今度は少し休みが貰へた上、天候に恵まれ樂々と登頂した。午後三時二十分太郎坊發、一八四〇米にて雪面に映える夕陽を眺めながらアイゼンを穿き星夜を發行、二、三〇〇米附近で

二度旋風に見舞はれ寶水火口壁から吹上げられた砂礫の流下する中を登らせられたのは閉口したが間も無く風和き七時三十分六合着。泊。翌二十七日午前九時發、夏道右側岩稜(赤岩黒岩)傳ひに午後二時無風快晴の頂上着(零下十六度)全國高氣壓(七六六ミリ)に包まれて一點雲も見えない夢のような眺望を満喫しながら觀測所淺間神社劍ヶ峰(三七七六米)大澤等を散策、すつかり朗らかになつて歸路は『ザイルの練習でも……』と劍ヶ峰火口壁側氷雪面をトラバースして遊んだが、全く『これが嚴冬の富士山頂か』と思はせるような長閑さだつた。午後五時四十分影富士を見ながら頂上出發。夕暮れの氷雪面(御殿場口夏道右側)を真直ぐ下つて六時三十分八合着。泊。翌二十八日午前八時三十分發、小春日和の上天氣に心行く迄高山の陽光を浴びながらひた下りに下りて來ると山麓はすつかりザラメ雪になつてゐた。『明日から三月。山も大分春めいて來た』太郎坊に十一時三十分着。三月十二日(日)珍らしく春の大雪で瀧ヶ原から五本松まで除雪人夫を出して自動車に辛じて進んだ。太郎坊附近の森林帯を自由にスキーで歩き廻れたのは嬉しかつた。箱根や籠坂も信越の山を見るように白かつた。三月一杯で冬の富士はお別れだ。それから毎朝出勤の電車の窓から少しづつ、雪の消えて行くのを眺めてゐる。富士は手近でいゝ。



研究欄

山岳語彙(九州地方)

九州山岳聯盟

オドウ(日向、肥後) 尾根と同意

ウチオトシ(豊後、日向) 比較的規模小なる瀧

ハエ(日向、大隅) 溪流の急瀧

ダキヤマ(日向、肥後) 岩石の露出

ドダチヤマ(同) ダキヤマに對し土にて成れる山

ツル(豊後、日向) 主として山間の平坦地

カンバ(九州一般) 伐採又は監視のために作る山小屋

ウド(肥後、豊後) 谷が岩壁等で遮斷され登るに困難な場所

ソウミ又はソウス(豊後) 水源地方で伏流が多量に湧出する所

ソネ・ウネ(九州一般) 尾根と同意

カウチ(九州一般) 谷の上流地方の峡谷

ツキアゲ(豊後、日向) 多くは山頂を意味す

ヤマカラン(日向) 山刀

動物植に關するもの

ナツギ(豊後、日向、肥後) 落葉樹

フユキ(同) 常綠樹

マモ(豊後、日向) ムササビ

ニク(九州一般) カモシカ

氣象に關するもの

〔フキツケ〕

ハナボロ(九州一般) 霧氷

登山用具重量表

山行に際して我々が身にまとい、ルックザツクに入れて背負ふ、色々な用具食料の重量は總括的に分ることがあつても、個々の品物に就て重量を知る機會は渺い。

左の表は會員三澤龍雄氏の手によつて作られたものである。用具重量の研究に當つて、第一石を投ぜられた事は資するところ大きく、氏の御骨折に對して感謝に堪えない。之は主として美津濃運動具店(神田)に陳列されてゐるもの、中より選擇して調査されたのであるが、かゝる研究は更に多方面の援助を希望して止まない。各方面より種々な報告を受け綜合して比較をした時に、更にこの表の價值は高められる事であらう。本表に掲げられた以外のものにて研究の要のあるものも、尠くない事と思ふ。併せて食料の重量表も研究の價值を認めてゐる。

會員諸氏の中にも、各自の用具の重量表を持たれてゐる方もある事であらう。この表をよりよくする爲に一、二の用具にても、御報告下されば幸甚である。(角田)

三澤龍雄調へ

[illegible]

山の消息



日本山岳會有志晚餐會

今年の花は遅いが、山の話に花が咲いて四月六日午後五時半から日比谷の山水樓で開いた、遠く筑紫から旅して來られた、竹内亮氏、大阪からの珍客、藤井九三氏等々古い人新しい人、山岳會の歴史の一頁から初

出席者(順序不同)

めた様な顔振れであつた、山の長老小島氏が風の神に見舞れて顔の見えぬのも、うら淋しかつた、席上高野氏の鎌尾根で兎に醬油を舐めさした昔話、竹内氏の九州の山々と沖の島島の奇智の話など、良い面白い話であつた。來會者次の如く、十時過宴を閉ぢた。

○印次回幹事に推薦

八木橋豐吉	吉田	竹志
磯貝藤太郎	山田	多市
茨木猪之吉	竹内	亮
○田邊 主計	藤木	九三
飯塚篤之助	大熊	保夫
多賀 富藏	高野	鷹藏
○檜 有恒	○黑田 孝雄	
○塚本 繁松	星野光之助	

[illegible]

岩菅スキ！登山道難

長野縣上高井郡須坂町小學校職員
八名の一行は、三月六日發發哺溫泉
から岩菅山ヘスキ一登山し、同日午
後三時宿舎たる發哺溫泉天狗の湯に
歸着したところ、一行中の水野忠四
郎氏一人途中にて行方不明となり、
一行及宿舎天狗の湯一同も狼狽し、
直ちに搜索隊を出して尋れしも何等
の足跡を見出す由もなく徹宵搜索の
甲斐なく、翌朝平穩スキ一俱樂部は
平穩小學校職員等の應援を求め大搜
索をなし、漸く東館山頂邊よりそれ
らしきシユアルを發見し、その跡
を一同によりて追かけし所、雖魚川
の流域について下方に降りし爲め相
當の疲勞と衰弱との爲め倒れ居りし
處を狩人達に助けられつ、六、七日
の雨中露聲し八日は狩人小屋にまで
件はれ、九日無事須坂町に歸着せし
ものにて、一時は生命にも異狀なき
かと心配せられしも無事なりしは不
幸中の幸なり。

早月尾根

發哺溫泉 關 金次郎

私こと去る彼岸の休日を利用して馬場島へ遊びに行きました。同志社三高法大等現役が試験休日を利用して早月尾根スキー登山の競争で仲々山は賑かでした。けれど未だ登られずに居ります。本年積雪は日本海の汀から釧の上迄續いて居り豊富な事にはびつくりしました。二五〇〇米突で引返しました。若し行ければ四月末に亦入山したいと策策して居ります。丸田は元氣ですが私は連れませうでした。それから丸田小屋は雪に

埋つて使へません。

私達の命として早月尾根に足を踏入れたのは之で五回目でありました。第一回は昭和四年の七月、井上大久保田中そして吉澤の四氏。之は東大谷から丸田谷を経て廻に向つたものであります。次は六年四月上旬、井上氏單獨にて丸田谷乗越の上まで参りました。七年には正月と三月の二回伊藤、井上、大久保三氏の組合せで参りましたが雪質過多の爲めキアラ谷の頭までしか行つて居りません。第五回は今度の行であります。

早月尾根の雪底は概して東大谷向に形成せられたまには池谷に面したのもあります。面白いのは尾根に直角に一間から三間以上の雪の段が出来来る事で之を登るだけに相當の勢力を費します。殆ど尾根通しを登る以外には策がなく、一度此の段を越つて池ノ谷側の急斜面をトラグアイスしましたが見事に三人共とも雪崩に乗つてしまひ〇氏は三十米突位流されました。之を落ちると雪崩は別として池ノ谷のあの瀧まで止る所がありません。

早月尾根の冬期登攀は結局輪廻、スキー、アイゼンのコンビネーションを要とせしませう。殊にスキーは多少の不便はあつてもゾンメルシより少し長い位のものが最も適してゐるのではないでせうか。尾根以外には絶対に通れぬ事などから長いスキーは禁物と思はれます。

二六〇〇米突から夏の露骨地までの間の雪積状態がどうなつてゐるか問題であります。それから先の岩場は案外雪の爲に容易になるのでは

ないかと思はれます。

要するに早月尾根よりの雪中登攀は前日に相當地點まで雪踏みをして置き而も夜半一時前後に出る積りでないと困難の事とせう。

(城南山岳會 田中生)

會員通信

北海道より

佐々保雄氏の報告にもある様にニベツ山石狩岳トムラウシ岳等が、これから多山として面白いと思はれます。〇先輩とは一九、二〇、二一日十勝岳、二六、二七、二八日無意根中岳、並河、喜茂別岳に遊び、四月二、三日にはマツカリヌツブリ(蝦夷富士)に登りました。幸ひに好天氣に恵まれ三つ共登頂が出来ました。〇先輩の意氣當るべからざるものがあります。今回の會報にある今西錦司氏の「山地スキー術私見」は目下スキーをやつて居りますので面白く思はれます。内傾回轉がどんなものか詳細は分り兼ねますが「型さへ完全に會得し、型さへ崩れる事が無ければ」と云つて居られる様ですが、其の條件が満ちるならば從來のクリスチヤニアで完全な回轉が出来来る様に思はれます。『ヨリ少ないエネルギーで』といふならば考へ方が又別と思ひますが。

商大山岳部 堀岡 清

〔雪質を考慮に入れなければならぬと思ふ。——編者〕

北アルプスより

小生儀三月三十日—四月四日間に

中房温泉より、中房川溯行東澤乗越に上り乗越小屋を手入して野營、四月一日銀鬼岳四月二日北燕岳に登頂致候、銀鬼は惡場多く意外に手間どり申候。中房川の二六〇〇米以上は雪にて埋り、雪橋ありスキーにて面白く御座候、人夫は島山善作を伴ひ候。

三國川より中ノ岳へ

四月三日—四日、三國川上流、下津川落合の小屋滞在、黒又澤、栃ノ木澤間の尾根に登り、中ノ岳を往復す。本年三月中旬、明大山岳部一行此のルートをとつて成功せり。

これは積雪期に於ける最初のものと思ふ。明大の連中、小生等もスキーは使用せざりしが、充分使用可能者あらん。五十澤村には適當の案内者はゐない。自分等は野中の江部爲吉(53)を連れた。

(四、五) 坂江善治

八幡平・岩木山・鳥海山

三月十八日 午後秋田發——大館秋田鐵道——花輪泊

十九日 好摩線小豆澤驛——谷内坂比平——熊澤蒸湯泊。谷内よりシ

ーをばく。途中のブナ林、温泉附近のトド松見事なり。

二十日 八幡平に登り山上高原を

彷徨ふ。中腹以下は樹木に蔽はれたるトド松の間をゆく、茫漠たる山頂殆んど他にその比をみず、展望開豁

也温泉より登り約二時間、降路は五キロ、ノーストップ。同行せる花輪

警林署の五十キロ選手は僅々十二三分にて滑降せり。積雪五六尺、質極

はめて良好、一滑の價値あり。

二十一日 新雪降る。往路を戻り

歸る。

二十五日 秋田午後出發——弘前賀田まで自動車、岩木山麓百澤泊。

二十六日 美晴、岩木山神社裏より夏道の通する尾根に登る。ウイン

ドクラスト非常に堅くスキーを擔ぎ登る。頂上まで約五時間。日本海、青

森灣の長江曲浦、八甲田連山、遠く北海道の山を望む。下りにも雪荷ほ

弛まず横滑りと制動に疲れたり。夏

道の尾根は幅廣く緩急自在にして粉

雪を得ば素晴らしき滑降を樂しみ得

べし。

四月二日 秋田——本莊——前郷

——矢島——木境藥師——本莊警林署事業所泊。藥師より約二キロ上り

西へ分岐する小徑を行く約一キロに

して事業所に達す。有名な樹の美

林の上に夕照の鳥海山を仰ぐ。積雪

四五尺。

三日 曇後雨、午前六時半出發、

殆んど夏道通り登り一四〇〇米にて

シタイクアイゼンに代へ午後零時半

七高山に達す。アイゼンに代へた

頃より濃霧雨を伴ひ強風至り山頂

近くにては吹き飛ばされん程の勢な

り。降路は五里霧中を彷徨しシデー

ボーより遙かに西方に下りしーを見

出す。一時間半を要す。日長く雪堅

かりし爲幸に事なきを得たり。六時

歸着。

四日 事業所より冬師山牧場、釜

臺嶺澤とシランデルンガを續け羽

越嶺西目驛に出づ。 藤島敏男

印度より

こゝへ來てから八ヶ月になるが山へ近付く暇が得られない。僅かに昨秋十月始め遊覽客を案内してサンダ

ツプーまで行つた。山登りとは言へない、然し月光を浴びたカンチエン

ヤンガ山群や、さては八十哩位隔つても可成大きく見えるマカルー

からエヴェレスト更らに西藏境の山々の展望は嬉しい限りだつた。暇があればカシミールへ這入りたい。こ

から十日もあればアマルナートからソナマルグの方へゆけるのだけれど

い、相棒がゐない。去年のナンガパルバット・エキスベティシヨンの新聞記事を送らうと思つたが印度の新

聞記事は愚にもつかないことばかりなのでやめた。二月二十八日

印度。孟買にて 曾原喜久藏

雜誌「ケルン」創刊

〇六月一日號を創刊號として月刊の山の雜誌「ケルン」が發行せられる

〇多數の同好者を擁しながら今まで

一つの開放的な定期刊行物をもた

なかつた關西在住の居人加納一郎

氏他數氏によつて編輯せられる。

〇菊判五〇頁くらゐ、二十錢程度の

ものであるが、内容は材料も筆者

も決して關西とは限局しない。全

日本的によびかけるものである。

勿論寄稿も歡迎する。

〇發行日を守ることを、決して讀み

てにされるやうな編輯はせぬこと

〇編輯所は

大阪市北區堂島大阪貯蓄ビル三

階七號「ケルン」編輯室

發行所は

東京 明文堂



會務報告

四月常例理事會報告

四月十三日午後六時より虎の門本會事務室に於て開催。

出席

木暮、冠、角田、額田、横、黒田、浦松、福島、中原、津田

議題左の如し

一、山日記に關する件

角田理事より経過報告あり、五月中旬梓書房より發行、定價一圓

一、高山深谷に關する件

額田理事より「高山深谷」寫眞畫集に關し報告あり、應募寫眞誌數約千枚の中より選擇の上、七月上旬發行之豫定。詳細委員會に於て決定を一任す。

一、山小屋に關する件
角田、横理事より報告。計劃中の現場調査隊は同行者の都合にて延引中なるも、近く出發の豫定。

一、關西在住會員の希望による關西集會室設置に就き、中原、津田兩理事より説明あり、追て具體案を協議することゝす。

退會者

昭和八年三月十九日付

(一五九) 大阪府 石川 文彦

會計

新湯縣 小川操氏(明治三十九年三月入會、會員番號三二)

昭和八年三月三十一日付計報に接せり、本會は茲に謹で哀悼の意を表す

新着圖書

第四回體育研究會々誌 體育研究所

山小屋 (三月號) 明文堂

ツリーリスト (四月號)

ジャパン・ツリーリスト・メモロイ

國際觀光 (第二號) 國際觀光協會

アサヒグラフ (四月五日號)

臺灣山岳叢報 (三、四號)

東京みなかみ會々報 (三、四號)

登歩趣味會々報 (第二號)

東京登歩溪流會々報 (第四號)

東京銀嶺會々報 (第一號)

がくれい會々報 (第十八號)

明峰山岳會月報 (四月號)

九州山岳聯盟 (第七號)

日本登高會々報 (第十九號)

廣島山岳會々報 (四月號)

R.S.C.部報 (第十六號)

神戸ヒヨコ登山會々報(三、四月號)

アルカウ趣味 (四月號)

ベテスツリヤン (三、四月號)

關西徒步會

ヘルケ (第十七號)

岡山々岳會

登山 (四月號)

武藏山岳會

Gener 1933

Wilson, G. : -

An Epitome of Fifty Years' Climbing 1933

會員寄贈

北樺太 大阪毎日新聞社探險隊報告

朝鮮風俗景寫眞帳

世界寫眞帳

朝鮮金剛山百景

新日本百景

國際寫眞情報日本新勝景號

太陽臨時増刊世界一周

同 日本山水大觀

VIEWS OF CALCUTTA AND DARJEELING.

地震 四卷八號一五卷三號

高山 深谷 自第一輯至第八輯

中川源三郎著 天氣講話

同 日本氣候學

一戸 直藏著 星

同 月

大谷 光瑞著 放浪漫記

國府 犀東著 富士一周

柳田 國男著 遠野物語

史蹟名勝天然記念物保存協會第三報

告 日光

伊藤 銀月著 豆相名勝草鞋日記

淺洲 漁父著 水雲徵

山當寅次郎著 土耳古譚觀

松川 三郎著 日がへりの旅

眞繼 雲山著 蒙古見物

朝日新聞社編 名家の旅

岡村 利平著 飛騨山川

鐵道院編 支那案内

津島 壹城著 信濃の山

坂野悦次郎著 木會の錦

武俠世界 山岳踏破號

學 生 山川跋涉號

探險世界 雪中富士登山號

中學 黑部谷の上流を流る

みつゑ 五周年記念號及天下

スカラツプ カントエンタムンガ

志村 鳥嶺著 岳美 第一輯第二輯

國際寫眞情報 宇宙の奇觀

同 世界の山水

同 世界の絶景

同 世界の大震と復興

同 山と水

同 冬の運動號

同 登山號及山岳涼味

同 富士山

同 富士山

同 富嶽遊草

同 日本之朝鮮

同 雪

同 世界の涼味

同 日本アルプス號

同 北海道號

同 秩父宮殿下御登山號

同 日本アルプス百景

同 大臺ヶ原山探險寫眞版二十枚

同 大臺ヶ原山探險寫眞版二十枚

同 大臺ヶ原山探險寫眞版二十枚

同 大臺ヶ原山探險寫眞版二十枚

同 大臺ヶ原山探險寫眞版二十枚

同 大臺ヶ原山探險寫眞版二十枚

同 大臺ヶ原山探險寫眞版二十枚

同 大臺ヶ原山探險寫眞版二十枚

同 大臺ヶ原山探險寫眞版二十枚

二萬分ノ一 同 一六一

五萬分ノ一 同 九七七

地質調査所發行地質圖 一一

日光地方六萬分ノ一地形圖 一

計 一二三枚

九州山岳案内(昭和三年版)

高松宮殿下久住山登山記念誌

以上工藤元平氏

山小屋委員會報告

一月以降の本會山小屋建設計劃に

關する研究會及委員會の經過を報告

する。

委員會 一月廿日 於三會堂 山

小屋建設費の豫算編成に就き協議す

調查委員會 一月廿六日於虎の門

席を求め、積雪、雪崩の状況につき

報告を得、意見を交す。

二月五日 角田理事大阪に赴き關

西理事其他數氏と種々協議をなす。

委員會の現場調査 二月九日於虎の

門理事會席上。計劃中の種高潤澤の

山小屋建設地は今日まで研究調査せ

るところにては、尙雪崩の危険に對

して若干の疑ひあり、更に慎重に調

査の必要を認め、近く、横、角田兩

理事外數氏現地に赴くことに決定す

二月廿六日 角田理事松本替林署

に赴き、建設に關して打合せをなす

調査出發打合せ會 三月十二日於

虎の門 横、角田、浦松、渡邊、初

見、本郷、今西、西堀出席の上、調

編輯後記

山岳の二十五週年記念と似た意味

で、會報の二十五號記念號を計劃し

たが、豫定の原稿が集らず、失敗し

た。然し近き將來に於てこれは遂行

したいと思つてゐる。

今西氏の山岳研究講話は航空便で

送つて頂いたが、残念ながら間に合

はず、次號に廻した。御了承を願ひ

度い。

原稿の次第に増して来る事は感謝

に堪えないが、希望としてはより更

に廣い範圍に亘つて書いていたとき

度い。就中研究欄はより以上に充實

したいものである。

本號の圖書紹介欄は都合により次

號に廻す。毎號ながら吉澤一郎氏の

援助は感謝に堪えない。(角田)

○山岳第二十八年二號

山岳本年度第一號は御覽の通り、

豫定通り遅れましたが、次號は必ず

豫定の六月末に出したい考を持つて

居ります。

原稿締切は四月末日であります

が、御投稿あらん事を希望致し

ます。

原稿締切四月末日

昭和八年四月二十四日印刷

昭和八年四月二十五日發行

發行所 日本山岳會

廣告一手取扱 進恒社

「山岳」バツクナンバー

VoL.	No.	定價	送料	VoL.	No.	定價	送料
3	1	¥ 2.00	6	10	2	¥ 1.00	8
4	1	2.00	"	14	2	50	"
"	2	2.00	"	"	3	50	"
"	8	2.00	"	15	2	50	6
5	2	1.00	8	"	3	50	"
"	3	1.00	"	16	2	50	8
6	1	1.00	"	"	3 (奥上州號)	50	"
"	2	70	"	17	2	50	6
"	3	70	"	"	3	50	"
7	1	1.00	"	18	1	50	"
"	2	1.00	"	"	2	50	"
"	3	1.00	"	19	2 (金剛山號)	50	"
8	1	70	"	"	3	50	"
"	2	70	"	20	2	50	"
"	3	70	"	21	2 (黒部號)	50	8
9	1	70	"	22	1 (第二奥羽號)	50	"
"	2	70	"	23	3 (臺灣號)	50	"
"	3	70	"				

日本山岳會

東京、芝、琴平町一、不二屋ビル307號・振替口座東京四八二九番